

〔巻頭随想〕

『弘前大学国史研究』創刊の頃

虎尾俊哉

本誌も遂に第百号を迎えた。久しぶりに古びた創刊号を手にし
てみると、さまざまな思い出が走馬灯の如く脳裡を過ぎ去り、尽
きせぬ感懐が胸裡に湧く。奥付には「昭和三十一年十一月三十日
発行」とある。しかし、これが世に出るまでには、実は一年以上
の前史があった。

時は昭和三十年三月十日、丁度四十一年前の今日である。処は
旧制弘前高等学校の木造校舎を引き継いだ文理学部の研究室。私
は最も身近な先輩、宮崎道生先生に或る提案をした。それは弘前
史学会ないし弘前史学研究会の創立と、その機関誌『弘前史学』
の創刊とである。もとよりいずれも仮称であるが、敢えて「弘前
大学」ないし「弘大」の名を冠しなかつたのには、いささか思惑
があった。その時、私は着任して一年半余で、三十歳になったば
かり、前年十一月の史学雑誌に「浄御原令の班田法と大宝二年戸
籍」を発表して、当面の研究テーマを律令土地法と定めて張り
切っていたし、宮崎先生も確か三十七、八歳であられ、新井白石
の研究に没頭しておられた。

昭和二十四年に発足した新制大学、ことに地方の国立新制大学

は、どこも貧弱な施設・蔵書・予算に苦しみながら、それでも新
生の活気に溢れていたように思う。とりわけ歴史学ことに日本史
の分野では、戦前の研究の蓄積から何を継承し、何を克服すべき
か。また従来のいわゆる郷土史から脱皮して、どのような新しい
地方史像を築くべきか。個々人の意識の深淺の差は別として、と
にかくこういう思いが活氣の源にあったと見て過たないであろう。
国公私立を問わず、各大学の教官・卒業生を中心に「〇〇大学史
学会」が次々に設立され、「〇大史学」ないし類似の名称の機関
誌が紀要とならんで発表の場となっていたのは、この活氣の発露
に他なるまい。

しかし、この点で弘前大学の史学研究室はいささか出遅れてい
た。尤も、弘前大学人文社会学会という、学部の壁を越えた、よ
り守備範囲の広い学会があり、『弘前大学人文社会』という活版
の機関誌を、定期的に刊行していて、それなりに発表の場を提供
していたし、また史学研究室の雰囲気そのものが非常に学究的
だったために、却って、研究会の開催や機関誌の発行など、繁
多な雑用を伴う新しい学会の結成を敬遠するような氣風を醸成し
ていたのかも知れない。その間の事情は新參の私にはよく分から
なかつたが、私個人としては一つだけ不便なことがあつた。それ
は他大学の史学関係の機関誌が交換の形で寄贈されて来ないため
に、そこに発表された論文を読むのに、大いに時間と手間を要す
るということであつた。冒頭に記した私の提案は、実のところ、
この不便さを解消したいという、いささか功利的な動機を含んだ

ものであった。旧来の郷土史家に代わる新しい地方史の専門家を育てる場を作りたいという目論みもあったし、卒論の中には、その一部なりとも公にしてやりたいとの思いに駆られるものもあった。もちろん、これらの方が主である。さらに言えば、弘前大学関係者以外の津軽在住の同学の士を糾合して切磋の場を広げたいという、大それた望みもあった。前記の提案に敢えて「大学」の名を入れなかった思惑というのも、この辺りのことに外ならない。しかし同時に、こういう直接的な動機があったことも否定できない、今風に格好をつけて言えば、双方向での研究成果の交換の場を作りたかったということになるのか。

ところで、この私の提案に対して、残念ながら宮崎先生からはあまり肯定的なご返事は頂けなかった。多分なにか然るべきお考えがあたりだったのであろう。そしてこの後、学年末・学年始めの多忙な日が続き、諸行事が漸く一段落したと思うのも束の間、津軽の短い春を謳歌する観桜会（当時は桜祭りだのゴールデン・ウイークなどの言葉はなかった）を迎えるにいたって、私も先きの提案を蒸し返す気も薄れ、徒らに時は流れて行ったのである。長男の誕生によって、何かとその方にエネルギーがとられたということもあった。先生の方にもいろいろお忙しい日々が続いていた。

その後の細かい経緯は省略するが、翌年の某日、この件について先生のご意向を伺うことができた。しかし、それは私の意表を衝くものであった。「会をつくるのも機関誌を出すのも結構だが、

それならいっそ国史だけでやってはどうですか」というのが、先生のご意向であった。理由として言われたことは、東洋史・西洋史の専攻生・卒業生は数が少なく、学外の研究者も津軽の地には殆どいない。従って、実際の繁多な雑務は国史専攻の者の肩に掛かって来ることは目に見えているし、船頭が多くなっても事の運びが面倒になるだけで、あまりプラスにはならない。大体こういうことであった。

なるほど先生の言われることは一理も二理もある。しかし、当時、新設の他大学にこういう例はなかった。少なくとも私は知らなかった。ただ國學院大学に国史学会があり、「國史学」という機関誌を発行していたことは承知していたが、これは伝統的に国史・国文を中心として多くの教員・大学院生・卒業生を擁する國學院大学だから出来ることで、東洋史二名・西洋史二名を併せても教官の総勢六人、助手もいなければ院生もいないという、眇たる我が史学研究室、しかもその中の国史専攻だけで事をなそうというのは、いささか荷が重い。少しでもメンバーが多い方がいい。それに東洋史・西洋史の先生方がどう受け止められるか、研究室内の和を損なうようなことになっても困る。こういう思いがさつと脳裡を駆け抜けたが、宮崎先生とてそんなことは百も承知の上で言われたことであろうから、無駄な陳弁はやめにして、この線で作ってみようと腹を決めた。会名・誌名に大学名を冠することも、先生のご意向に従った。おまけに、月刊は無理でもせめて隔月刊にしようと思ったのだから、思えば大胆不敵というより無茶

というべきであった。

果たして、それからが大変であった。創刊号と第二号、二冊分の原稿は揃った。編集も終った。両面印刷のため、四・一頁、二・三頁、八・五頁の順に切らねばならぬガリ版は、経験豊かな大学職員の一人が受け持ってくれた。表紙に使う誌名の字体は普通の明朝体では飽き足らないと、これまた余技にデザインを得意とする大学職員の一人がわざわざ描き起こしてくれた。

謄写印刷・製本・宛名書き・発送は全部国史専攻の学生がやってくれた。いずれもボランティア精神の賜物という他はなかった。

「創刊の辞」は、宮崎先生にお願いしたが、お前が書けというご命令である。この理由は今もって分からないが、先生のご意向は大体承知していたので禿筆を振るってお目にかけてが、特にご異論もなかった。こうして昭和三十一年十一月三十日付けで、漸く創刊号が世に出たのである。次号の内容予告まで載っていて、その点は立派なものだが、数十箇所正誤表を必要とする底のもので、いかにも素人集団の手作りの雑誌といった感じのものであった。この創刊号を制作した時、お手本にしたのは、やはり謄写印刷で出ていた『続日本紀研究』誌であったが、とてもこれには及ばぬ粗末な体裁の雑誌である。しかし、いやそれだけに、製本の済んだ最初の一冊を手にした時の喜びは大きかった。

最後に、後日談という程のことでもないが、上記のことに関連して記憶の底に張りついているものを三つほど紹介して、この蕪稿の筆を擱かせて頂くこととする。

一つは、或る年の東北史学会の席上でのこと、当時、福島大学におられた小林清治氏から「国史だけで機関誌を出されたのはよかったですね。羨ましいですよ」と言われたこと。どこの大学にも似たような事情があるらしかった。

二つ目は、十号ぐらい出た後のことであつたらうか、東大の国史研究室の書架にクロス装で製本された本誌を見出したこと。なにか漸く市民権を得たようで嬉しかった。

三つ目は、大分後のことだが、坂本太郎先生から「ほう、君が書いたのかね。宮崎君だとばかり思ってたよ」と言われたこと。「創刊の辞」のことであるが、かなり古めかしい文体で、今でも思い出すたびに冷や汗が流れる。

元氣と銜氣とが同居していたあの頃。今となつては、却つてその若さがいとおしく感ぜられる。四十年という歳月はやはり長い。百号という号数はやはり重い。第一百号からまた新たな一步を刻む本誌の前途に幸あれと念じて止まない。(平成八年三月十日稿)

(としお・としや 本会顧問 神田外语大学教授)